

# 身近なまちの風景物語(19)

## 栄華の余韻

商店街や通りに名前があれば、呼びやすいばかりでなく、その場所の履歴を知ることにもなる。町名が使われていても良い。

その固有の名称は地域に住まう人たちにとっての愛称になる。それを使うことによって身近な存在になり、親しみを感じることができる。

各地を歩いて多く目にするのは、〇〇銀座商店街である。全国に300箇所以上あるという。日本を代表する繁華街である東京・銀座にあやかって全国に普及した。

たしかに〇〇銀座商店街は、そのまちで最も賑やかな商店街であることが多い。なかには銀の上は金として、□□銀座商店街もある。

△△すずらん（鈴蘭）通り商店街もよく見かける。商店街の街路灯が鈴蘭に似た形であることから名付けられた。

大正14年頃に東京・神保町でこのような街路灯が設置された商店街が繁盛したことから、それに便乗して広まったという説もある。

新たに名付けると、認知されるまでに多少の時間はかかる。さまざまな媒体や装置などを通して、それが目に触れ、使用されることで定着していく。そしてその固有の名称が一度浸透すると愛着も生まれる。

商店街の入口には何かしらの目印となる装置がある。ゲート（門）だったり、標柱だったり。そこには愛称となる名前も記されている。この入口は、寺院の山門、神社の鳥居のような世俗の境界ともいえる。

文字を含むこの装置のデザインは時代を表す。そのデザインから、場所の記憶と履歴をたぐり寄せることができる。そしてかつての栄華に思いを馳せることもできる。

野中 勝利

筑波大学芸術系教授・芸術専門学群長



挿絵：久田琳佳子（筑波大学芸術専門学群4年）